

助産婦歴四半世紀

西 幸江

聖バルナバ病院産科婦長

私はまもなく半世紀を生きることになる。そして助産婦としては四半世紀働いたことになる。

助産婦になるときの私の動機は「夢ふくらませて」というものではなかった。看護学生時代、産科病棟実習はどちらかと言えば嫌いだった。なぜって、助産婦が怖かったのだ。実習から戻ると友人たちとよくグチり合ったものだった。

なのに、看護婦として就職、ある春の部署異動で、産科病棟に配属されることになった。発表の日私は帰省していたが、発表を見た友人が電話をくれた。私が産科病棟を嫌がっていることを知っていて心配してくれたのだった。そのときは本当に、どうしようかと悩んだ。

いざ働いてみると、同世代の新しい助産婦の就職もあり、“怖い”という印象は消えた。しかし、産科病棟で看護婦として働くことは、私にはなんだか、今ひとつ物足りなかった。そして、ある日こっそり助産婦学院の入学試験を受けた。助産婦学院入学が決まったとき、親や友人から「あんなに嫌がっていたのに、どうして……」とびっくりされた。それ以来、今日までこうして助産婦の道を歩んでいるのである。

四半世紀

私は今年、病院の永年勤続表彰で25年表彰を受けた。四半世紀を助産婦として聖バルナバ病院で働いたことになる。しかし、25年も働いたという実感はない。今改めて考えると、「25年もの間何をしていたのだろう。これでよかったのだろうか!」と考えることがある。でも、助産婦の仕

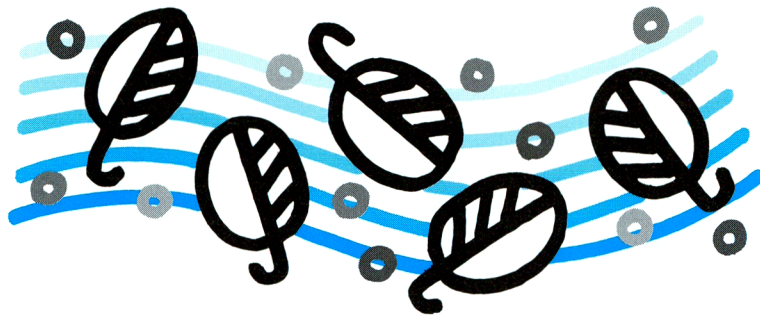
事が嫌になったことはない。

考えれば、長いけど短い25年だった。助産婦学生時代、頭の中が真っ白になりながら、震える手で介助させていただいた女性の子どもたちは、25歳になる。まもなく2代続けて介助させていただける日がやって来るだろうと思うと、なんだかうれしくてわくわくしてくる。

助産婦学生時代は素晴らしい仲間と出会い、しんどかったけど楽しく充実した1年を過ごすことができた。そして、病院勤務の間には色々な研修に出かける機会に多く恵まれた。出会った人は助産婦であつたり他の職種の人であつたりさまざまであるが、人の輪が広がり、みんなから多くのことを学ばせてもらった。そして今も、その仲間たちから支えてもらっているような気がする。

25年は人間としてそれなりに成長できたのかなと思う。自分の成長と共に、仕事内容も当然変化する。スタッフとしてがむしゃらに楽しく働いた時期、学生指導に楽しく苦しく明け暮れた日々、そして今は頼りない婦長として悪戦苦闘中。

素晴らしい先輩、後輩との出会いも数多くあった。同じ病院に長くいると、同級生が「娘の受験についてきたの」と突然訪ねてくれたり、助産婦学院、病院を巣立っていった後輩から突然の便りや訪問がある。なんともうれしいかぎりである。国内外で活躍する後輩たち、教えたはずの後輩たちのことが、まぶしく見えたりする。危なっかしい実習でどこまで待とうかこちらがイライラした学生、就職して予想をはるかに上回るドジにこちらの命が縮みそうになった新入り助産婦、色々な



人と働いたが、今はその彼女たちと同じ目線で、助産について語り合うことができる。実に素晴らしいことだと思う。そして今、私が助産婦として第一歩を歩み出したところに生まれた若い助産婦たちと、自分の年齢を忘れて楽しく働いている。

苦慮しています

苦慮していること。ひとつは、伝統ある聖バルナバ病院の分娩数が減少してきていることである。少子化の影響もあると思うが、少子化の速度より速いように感じられる。建物や設備の老朽化、現代的アメニティの魅力に少々欠けること、これらは現代の人たちにはマイナス因子なのだろうか。しかし助産婦学院を併設していることもあり、助産、看護の質は捨てたものではないと自負している。

もうひとつは、私の助産婦の原点でもある聖バルナバ助産婦学院の存続が危ぶまれていることだ。来年度の募集定員の減少が決定している。しかし、大学化の影響で専門学校の閉校が相ついでいる影響もあるのだろうか、応募者数は増えている。病院は学院の影響をもろに受けると思う。なぜなら学院があることにより、看護の質の向上を考えざるを得ない。刺激を受ける。そして“助産婦”という大切な人材確保の場となる。病院の繁栄のためにも、各地で活躍する同窓生のためにも、母校が末永く存続していくことを願っている。

友との別れ

これまで出会った友のなかには、自分の夢を持

ち前向きな人生を歩んでいたにもかかわらず、働き盛りの42~43歳という若さで神に召されてしまった人が3人もいる。「なぜ!」と言いたい。つい先日も告別式に出席して来た。

その友人とは厚生省看護研修研究センターで、本当に厳しいがこれまでの人生でもっとも充実した1年を一緒に過ごした仲間である。時間の経過と共に、お互いの連絡も薄れてしまいがちになっていたが、彼女とは冬に電話で話をした。そのとき、抗がん剤を使っているが病院は退院して自宅にいて、教え子の看護学生のなかに助産婦希望者がいることなどを話してくれ、春には職場復帰をするつもりと言っていたのに。

電話から聞こえる彼女の普段と変わらぬ元気な声に、私はすっかりだまされてしまっていた…。今思えば、あのときもっと深く考えていれば、こんなふうな永久に眠ったままの彼女との再会でなく、もっと会話ができたはずなのにと、悔やまれて仕方がない。クラスのなかではみんなをよくまとめてくれていた。皮肉なことだが、彼女の死を連絡したことで、久しぶりに何人かの友の声を聞くことができた。彼女が私たちに何か課題をくれたような気がする。どうぞ安らかに眠ってください。

次は聖バルナバ助産婦学院の後輩、富田江里子さんにバトンタッチします。富田さんは青年海外協力隊に参加し、今は同じ隊員であった夫の仕事の関係で、日本とフィリピンを行ったり来たりの生活をしている。フィリピンでは主婦、母をしながら、助産婦職を活かしてボランティア活動をしている。